

地中海的集落形成のエコロジー

—内陸シリア北部の古代オリーブ・プランテーション村落—

渡 辺 金 一

オリーブ・プランテーションは、地中海地域に固有の景観であり、そこで営まれる村落生活は、独特のリズムをもって展開される。

内陸シリア北部の石灰岩山地には、ローマ帝国への編入とともに、オリーブ・プランテーション村落の集落形成の可能性がそなわり、事実、続くローマ支配の数世紀にこの可能性は実現の軌道にのる。そして古代末期には、オリーブ単作に専ら依拠する村落がこの山地の最も奥まった部分で繁栄の絶頂にたっし、その人口密度も最大規模となる。だが、7世紀のはじめ、この地方は、まずササン朝ペルシア軍の長期占領、つづいてアラブ軍の進出によって、突如として経済的に致命傷を蒙る。山地のオリーブ・プランテーション村落はすべて、この数十年の間に放棄されて、完全な廃墟と化す。その状態は1300年以上も続いたのち、第一次世界大戦後の政治・経済状況、ことに第二次世界大戦後シリアが名実ともに独立をかちとるなかで、再入植が開始されるが、それも昔日の規模には遥かにおよびない。

ロシア人建築家チャレンコが1935年から1946年にわたる綿密な現地調査にもとづいて明かにしたこのおどろくべき古代オリーブ・プランテーション村落の興廢の歴史は、一方で、古代末期における大土地所有制の形成と農民のそれへの隷属化という通説、あるいは、いわゆる貨幣経済から実物経済への、市場経済から封鎖経済への移行という通説に逆行する、事態の進行を示すとともに、他方で、ゲルマン民族移動によ

っても破壊されなかった地中海国際交易圏がイスラムの進出で解体するというピレンヌ・テーゼと奇しくも符合している。

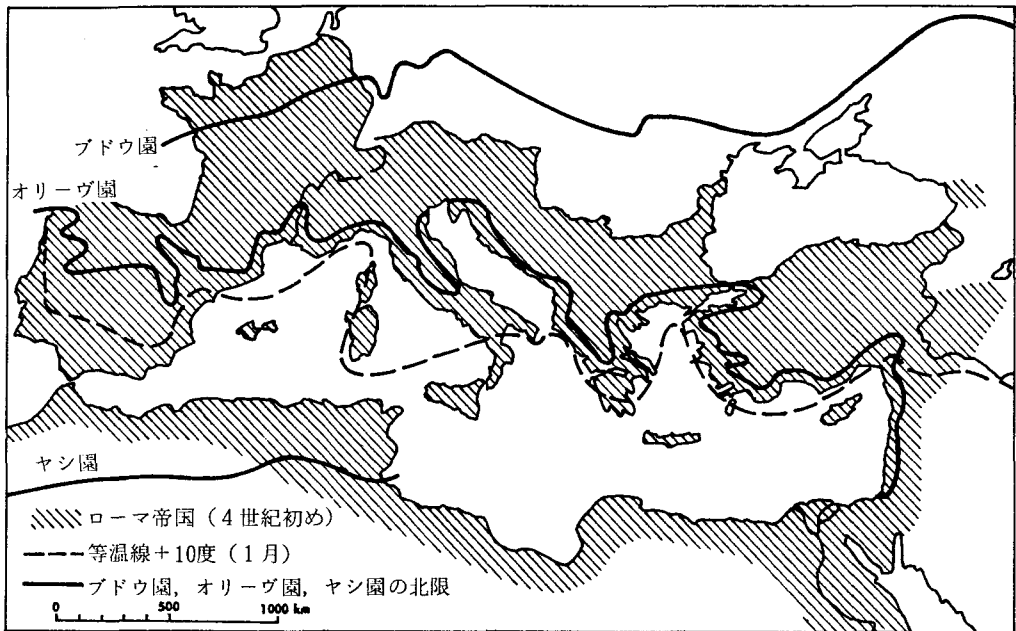
本稿が検討の対象とするのはこのチャレンコの問題作——それはどういうわけかこの国では全く省みられていない——のうちのエコロジ的な条件に関する部分であって、かかる可能態の歴史的実現過程である、紀元後1世紀から7世紀前半にいたる内陸シリア北部の石灰岩山地のオリーブ・プランテーション村落の展開とその消滅の具体的進行については、稿をあらためて論じたい。

オリーブ・プランテーション村落 のモンタージュ

オリーブ林は地中海地域に独特の景観である。それは、日本の植生のなかに見出すことが、まず困難な色調だ。あえていってみれば、くすんだ銀の地に、淡い緑を重ねあわせたもの、とでもいうことになるうか。

かつて、このオリーブ・プランテーションによって随処におおわれていたのが、シリアの地中海東海岸を東方にほぼ50キロメートルほど内陸に入ったところからはじまる、南北約140キロメートル、東西20～40キロメートルの石灰岩地質の山地のその傾斜面であった。このオリーブにいろどられた傾面をのぼりつめたところ、平均標高海拔400～500メートル、頂上は600メートル、時に800メートルを越える峰の上には、いくつもの村落が点々とのぞまれた。これら村

第1図 オリーブ園からヤシ園におよぶ＜真の＞地中海



ブローデル『地中海とフィリップ二世時代の地中海世界』第1巻, 212頁

落は、古い建物の金色、黄土色から、ごく最近建てられたばかりの建物の象牙色——時には白色まで——に至る、材質としての石灰岩が作り出す暖色系の色階を、この地方特有のあのまぶしいばかりの紺碧の空のもとにくりひろげ、また、屋根瓦の赤色と、すべての建物に設けられた、日よけ、雨よけの柱廊の、ふかぶかとした黒い陰とが、集落全体にわたって、モザイクのようにちりばめられていた。

季節は10月。この地方に4月から続いている長い乾期が明けて最初の降雨をみるまでには、まだ1カ月あるが、オリーブの実はずでに熟しはじめている。峰上の村々は、1年のうちでもっとも忙しい数週間をむかえようとしている。すでに穀物の刈り入れと脱穀をおえた近くの盆地や、さらに遠くの周辺部の平野から、村によっては、人口の数倍にもものぼろうという季節労働者が到来するからだ。いうまでもなくそれは、村人だけでは到底処理しきれないほど大量のオ

リーブの実をひろい集め、オリーブ油をしぼり、はこび出すためである。その作業が、数週間という限られた短い期間にきばきと済ませなければならないものであってみれば、その手順について、村人同士の間で合意と了解が必要になってくる。村の集会所では寄り合いがはじまる。

季節労働者の宿舎となるのは、たとえば、小さな村には不釣り合いに宏壮な教会だ。かれらのための食糧の準備も欠かすことのできない配慮である。何しろ、傾斜地が大部分という地理的条件から生れた、オリーブ単作の峰上の村落には、もともと穀物栽培のための平坦な土地も充分になく、また、降雨量が僅かで牧畜経営にまわす分の水の余裕もなく、したがって、平常でさえ穀物と食肉は、石灰岩山地の東に展開するさらに内陸のシリアの平野ないしステップから、野菜は同山地の西および北の灌漑河谷から、供給を仰がなければならない状態なのである。そしてもちろん、製造したオリーブ油をつめては

こび出すための革袋や瓶も、ここでは材料がないとなれば、この地域の外からはこび入れるはかない。

季節労働者の応援をえて作業にとりかかる前に、どうしても終えておかなければならないものに、各農家が、家によってはいくつも所有する搾油場を、あるいは、村によっては存在する共有の搾油場を、整備する仕事がある。それはたとえば、圧搾機の点検であり、岩のなかに切りこまれたタタキ、槽、溜壺、それに、水やオリーブ油を流すために処々にあけられた導管の掃除である。

さきあげたような物質を調達するためには、村人は峰上の村から細道を下って、近くの盆地周辺の、この地方と外部とを結ぶ街道にそった集落にまで出向いてゆかなければならない。また上にのべた季節労働者の調達も、この地方全域のオリーブ・プランテーションの実が、定期的に一斉に熟しておちはじめるのであってみれば、各村へのその配分の順序や人数に関して、それぞれの村の代表者たちの間で打合せや話し合いも必要となるが、この調整作業がおこなわれるのも、いまのべた街道すじの集落である。そして何よりも、内陸の山間村落と外部とをむすぶこの石灰岩山地周縁の中継点には、この地方の大量特産商品オリーブ油を買いつけるための商人が、プランテーション所有の村民たちと売買契約をおこない、現品をうけとり、はこび出すために、地中海沿岸の大都市から集って来ている。したがってここには、商談や取引のための集会所、宿舎や、ウマ、ロバ、ラバなどの運搬用家畜の繋ぎ場を含んだキャラバン・セライユ、倉庫、それに、粗製のオリーブ油原油を精製する精油工場、もちろん教会、そして場所によっては浴場などの建物が集っているのはいうまでもない。

やがて季節労働者をむかえてはじまる作業は大変手間のかかるいくつもの段階から成り立っ

ている。腰をかがめて地面からオリーブの実を拾い集める仕事はけっして楽なものではない。時には木にのぼって、まだ枝にのこっている実を地上におとすことからはじめなければならない。集められた実は、ロバやラバの背につんで運ばれ、搾油場の前で荷おろしされる。オリーブ油の製造過程は、搾油場の規模や構造によってさまざまであるが、一般的にいて、製油の最初の工程は、すりつぶしである。オリーブの実は、すりつぶし槽に入れられて、石材のローラーをかけられ、核をはがされるとともに、そのさい出る苦いアク(amurca)を除かれたうえで、出来あがったペースト状の果肉が籠につめられる。続く工程が、圧搾である。籠は圧搾槽にうつされ、つみ重ねられ、その上に木製の重い板(*orbis olearius*)があてがわれる。そして圧搾装置でオリーブ油がしぼり出される。出てきた油は溜壺に導びかれる。最後の工程が、それに水を加えての原油からの不純物の分離であり、それは具体的には、いまのべた溜壺にたまったオリーブ油を洗滌槽にうつし、水を加えて洗滌し、滓が沈殿したあとの上澄み部分すなわち純化されたオリーブ油を別の溜壺に流す、という順序でおこなわれる。

これを要するに、オリーブ油製造は、オリーブの実の採集、運搬、そしておそらく選別にはじまり、搾油場での作業も、果肉をすりつぶし、圧力を加えて油をしぼり、出てきた油から不純物を除く、という三基本工程に加えて、果実ペーストの籠づめ、オリーブ原油洗滌用の水のはこび入れ、溜壺にたまった原油の洗滌槽へのうつしかえがあり、その間たまったアクや分離された不純物を外に捨て、また汚れた槽、溜壺、籠を洗う必要もしばしばおこってくる。こうして得られたオリーブ油は容器につめて、ロバやラバの背で運び出されるのであるが、何しろベタつく植物油を相手にしての労働はけっして楽なものではない。

村々を経巡ってはオリーブ油づくりを手伝ってゆく季節労働者たちの移動がシリア内陸の石灰岩山地のオリーブ・プランテーション地帯全域ではじまってすでに数週間、月はなには最初の降雨をみた11月も、月ずえともなれば、かれらは一人残らず去って、この地帯はふたたび、外部からは隔絶されたもとの世界に帰ってゆく。

オリーブ・プランテーションの世話は、冬期の4~5カ月に、オリーブの木を剪定し、土壌を掘り起すだけで足りる。落された枝は、この地方の木材不足を部分的にうめあわせるとともに、のこりは燃料として使われる。石灰岩地のこの地方は表層の腐食土もなく、水不足と相まって、樹間に他の作物を耕作する可能性はさいしょから存在しない。

こうして生れる翌年のオリーブ収穫期までの余暇を、オリーブ・プランテーション地帯の住民はあげて、石灰岩の岩地との取組みにささげる。ちょうどアルプス以北の中世西ヨーロッパの農民が、斧で森村地帯を開墾していったように、ここでは人々は、木槌と鑿を手この岩地を開墾していった。それは、たとえば、プランテーションをひろげるためであり、小道やテラスをもうけるためであり、水溜を掘るためであり、排水溝をつけるためであり、搾油場をすえつけるためであり、家をたて、墓をつくるためである。

そのさい大変興味深いのは、それぞれの建築現場で石切場が開設されることであり、そのあとが水溜として利用されることである。それは、切り出された石材が運搬の必要がなく、その場で使えるという利点のほか、年間平均降雨量500ミリの天水に専ら依拠する石灰岩山地という、この地方特有の地理的事情にも起因している。この山地の、岩だらけで起伏の多い地勢のもとでは、大貯水池設定の場所を見つけるのが困難であるばかりか、表面に裂け目が多く、水をとおしてしまう石灰岩の土地で、遠くから溝

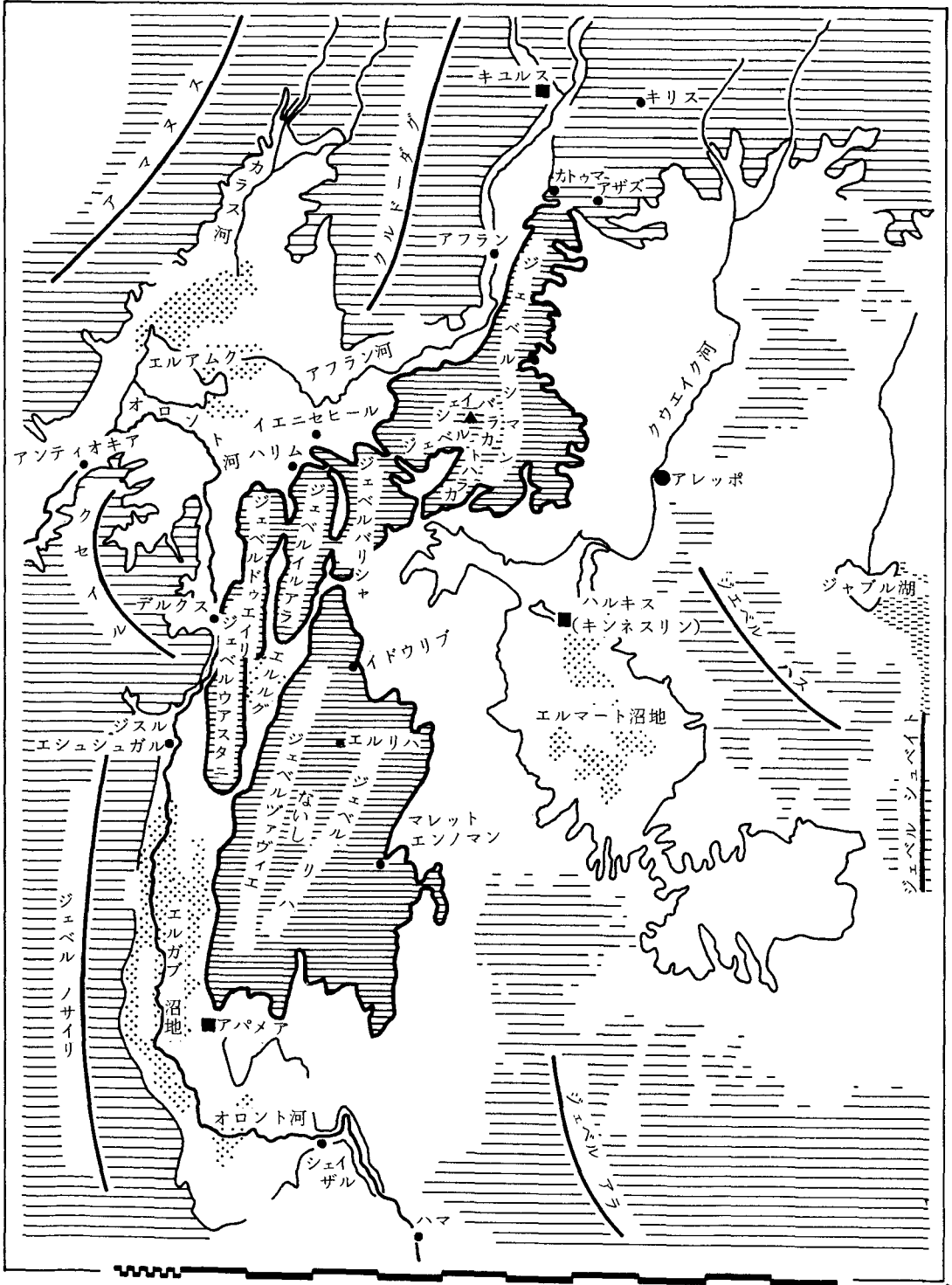
をほって水をひいてくることは、ますますもってむずかしい。そのことは、この地方から大集落形成の契機をとり去り、反対に、同一規模の小村落の均等な分布をうながす一つの条件となったのであるが、それとならんで、村落内に無数の簡単な水溜を生む要因ともなった。それは直径4~5メートル、高さも同じの円錐台の形をし、口が何枚かの敷石でふさがれ、そこには四角な汲取口がとりつけられて木製のふたをかぶされていたが、この水溜から供給されるのが、人間の飲み水とならんで、さきにみたように、オリーブ油づくりに使われる相当量の水であった。

これを要するに、オリーブ・プランテーション地帯の農民は、「農閑期」の半年以上のあいだは、石切工、石工に転ずるのである。そのかれらによって土台がためされ、建築家をリーダーとする遍歴の専門職人チームの手で最終的に仕上げられたのが、この地方の村落遺跡が示すおどろくべき高度の技術水準と、風格ある独自の芸術表現をもった建築物であった。

チャレンコの現地調査

上述のモンタージュで対象となった村落が分布する地域が、内陸シリアの石灰岩山地であることは、すでに述べたが、時代が紀元6世紀頃であることは意識的に伏せてきた。それは、読者を、千数百年のへだたりをとびこえて、このオリーブ・プランテーション村落がもっとも栄えた頃の、独特の生活のスタイルとリズムのなかにまず導きいれるためであった。実際、モンズーン地帯の集約的な稲作水田耕作を頭において、われわれが作り上げる村落生活の映像から、これほど遠いものはまずないであろう。

モンタージュ作成にあたって私が依拠したのは、三巻から成る部厚な、自身の考古学調査に基くチャレンコの研究*であり、また、私自身、文部省の海外学術調査（現地調査）研究費補助



第2図 石灰岩山地の地名 (チャレンコ, 第25図)

金**の支給をうけて、エーゲ海キクラデス諸島の一つナクソス島の、オリーブ園にかこまれた山間の村落で、1977年の秋、オリーブの実の採集と搾油——とはいっても、搾油工程は、電動の粉碎機と遠心分離機がそなえつけられた今日、主な手仕事の部分は、オリーブの実のペーストを、太くてかたい化学繊維の円板（メイド・イン・ジャパン）の表面に塗って、それをつみあげるだけとなっている——のシーズンをすごしたときのささやかな生活体験である。

★ Georges Tchalenko, *Villages antiques de la Syrie du Nord. Le Massif du Bélus à l'époque romaine.* (Institut français d'archéologie de Beyrouth. Bibliothèque archéologique et historique, L) 3 vols. Paris 1953, 1958. 以下にみるように、チャレンコの研究は、1964年の時点における調査結果の総括であり、したがってかれがシリア北部の内陸でつぶさに観察した「現代」事情もその時点までのものであって、その後30年間にここで進行した事態は当然のことながら含まれていない。ただこの最後の点について吟味するでだてを欠いている現在、以下の叙述はさしあたりチャレンコの研究時点をもって現況とし、現地調査をまっぴらめ検討を加えるしかない。

★★ 一橋大学地中海研究会『地中海島嶼社会の総合的研究』一橋論叢 80~6 (1978); Research Groupe for the Mediterranean at Hitotsubashi University, *Studies in Socio-Cultural Aspects of the Mediterranean Island.* Tokyo, 1979.

チャレンコの研究の意義は、いかに高く評価しても、まず、しすぎということはないであろう。アンティオキアの後背地にあたるこのシリア北部の内陸地方の考古学調査は、今から凡そ百年ほど前、マルキ・ド・ヴォゲによって同地方のキリスト教会建築を対象としてはじめられ、

ついで前世紀末から今世紀はじめにかけて、H・C・バトラーによって試みられたのち、チャレンコによって新しい局面を拓かれたからである。

かれが調査をはじめたのは、1935年、対象は、この地方の大巡礼地、柱の上の行者聖シメオンの大聖堂(Qal' at Sim'an)であった。地図でみるように、シリア北部の内陸の石灰岩山地は、北部（ジェベル・シマン）、中央部（南北に平行して走る三つの山脈、東から順にあげると、ジェベル・バリシャ、ジェベル・イル・アラ、ジェベル・ドゥエイリ＝ウァスタニ、から成る）、南部（ジェベル・ヅァヴィエないしジェベル・リハ）の三山塊から構成されているが、かれは聖シメオン聖堂の考古学調査とそれに基く修復作業をつづける過程で、この聖堂が所在する北部山塊の古代村落跡をつぶさに観察する機会をもったのである。

チャレンコはこの仕事を続行する傍で、1936年には中央部山塊中のカルブローゼ村のバシリカ教会修復を開始するとともに、1938年には南部山塊中の唯一の都市的大集落エル・バラで、将来の修復作業にそなえての予備調査をおこなったが、ここでもかれの関心は、教会建築の域を超えて、無数に分布する古代村落と景観との関係に拡大していった。翌1939年かれは、北部山塊中の唯一の都市的大集落ブラードで、のちにシリアのキリスト教聖堂建築研究を著すことになるJ・ラッシュスと共同して、考古学的調査をはじめた。そして第二次世界大戦の勃発にともない、ブラードでの調査は放棄したものの、聖シメオン大聖堂およびカルブローゼ村バシリカ教会の修復作業は戦争中も続行し、その間、近傍の一連の古代村落遺跡を実地に調査することができた。こうしてかれは、古代村落がかつていかに組織され、また、景観と集落居住との間にはかつていかなる関係が存在したか、という問題、またそれからさらにすすんで、現在ではほとんど放棄されているこの地方におい

て、社会経済生活はかつていかに展開したかという問題にひきこまれていった。この研究調査を1946年いご整理して発表したのが、うえにあげたかれの大著であった。

チャレンコの心をとらえたのは、ごく最近まで全く放棄され、第一次大戦後の平和な30年ほどの経過のなかで、ようやく部分的に再入植がはじまったこの石灰岩山地にどうして古代村落がかくも栄えたのか、という問題であった。実際、かれがそこでたしかめた古代遺跡は、約780箇処にもものぼっていた。それは、さきの北部、中央部、南部の三山塊でつぎのように分布し、またそれを、

(1) 今日なお全く放棄された遺跡、

(2) 今日そこに部分的に入植がおこなわれた結果、いわば古代村落と現代村落が同居している遺跡、

(3) 今日シリアでよくみられる、人口も多い多数の現代村落が、先行の古代村落を消し去ってしまい、ただ偶然のこった、ないし、現代村落の住民によって転用された古代村落遺物からようやくそれと判明する遺跡、

の三つに分けてみると、つぎのようであった。

1. 北部山塊 229 遺跡

- | | |
|----------------|-----|
| (1) 放棄された古代村落 | 104 |
| (2) 古代・現代村落の同居 | 53 |
| (3) 現代村落 | 72 |

2. 中央部山塊 271 遺跡

- | | |
|----------------|-----|
| (1) 放棄された古代村落 | 121 |
| (2) 古代・現代村落の同居 | 31 |
| (3) 現代村落 | 119 |

3. 南部山塊 278 遺跡

- | | |
|----------------|-----|
| (1) 放棄された古代村落 | 96 |
| (2) 古代・現代村落の同居 | 51 |
| (3) 現代村落 | 131 |

現代における古代村落遺跡の在り方で区分されたこの(1)、(2)、(3)は、概していえば、夫々地理的に特定の分布傾向を示していた。(1)の、放

棄された古代村落は、石灰岩山地の最も高い峰上の地帯に、(2)の、古代村落と現代村落が同居する遺跡は、この山地内の傾斜地帯に、(3)の現代村落は、この山地の最後の傾斜地が広い平野にひらける地帯に、夫々分布していた。

チャレンコがのべているように、何らかの古代村落遺跡がないところでは現代村落はつくられず、それは、現代入植者は石切りが出来ないために好んで遺跡に居をかまえるからだ、とするならば、上掲のリストは同時に、石灰岩山地における古代村落と現代村落の全体数の比較でもある。また、(2)の古代・現代村落の同居のケースでは、古代村落が規模の点で同居現代村落を上廻っていることを考慮すると、現代とは逆に、(1)と(2)とを合せた山地内部全体の人口密度は、かつて、石灰岩山地周辺部の(3)を凌駕していたであろうことが容易に推察される。そしてまた、上記リストを地図の上に画いてみると、北部山塊のジェベル・シマン中部から、中央部山塊のジェベル・バリシャおよびジェベル・イル・アラにかけての地域が、現代では全く放棄されているが、かつては人口密度が最も高かったことが明かになる。事実ここでは、古代村落同士が1キロメートル以内の距離にある場合さえまれではなかったのである。

このように、古代村落遺跡のあり方の上での上記三区分は、同時に地理的な分布の三区分を意味しているが、そればかりではない。それはまた、農業的な三区分にも対応している。すなわち、(2)の古代・現代村落同居のケースでは、限られたわずかな平地での穀物栽培と並んで、斜面でのオリーブ・ブドウ・プランテーションがおこなわれ、(3)の現代村落では、広い耕地に穀物、そして新しく綿花栽培がさかんである。そしてもちろん、傾斜地ではオリーブ、ブドウのプランテーションがおこなわれている。これに反して、(1)の、現在では放棄されている古代村落は、かつてここがオリーブ単作の中心だっ

たことをうかがわせる、搾油場のあとが、無数に見出されるのである。古代村落繁栄の原因としてチャレンコが着目したのは、まさにこの事実であった。

かれによれば、古代村落の経済的發展を部分的に再現しているのが、第一次大戦終了後30年足らずの期間にこの地方で進行した事態であった。

1918年の秋、ローレンスにひきいられたベドウィンが独立運動の狼煙をあげてから、続くフランス保護領時代を経て、第二次大戦直後の1946年4月、完全な独立をかちとるまで、シリアがたどった政治的運命は変化をきわめたものであり、ことに、1939年独立サンジャック区アレクサンドレッテ(イスケンデルン)——第一次大戦後の政治的シリア細分の結果生れた——が、フランスによって友好条約の代償としてトルコに割譲され、われわれがいま問題としているシリア北部の石灰岩山地の東縁にそってシリア・トルコの国境が走るようになったことは、この地帯とアンティオキア(現代のアンタキア)とのあいだに存在していた古来の歴史的むすびつきを絶ち切る結果となった。それにもかかわらず、この地帯は、第一次大戦後の平和の再来と秩序の回復を背景に、トルコ支配末期の経済的沈澱と人口減少から徐々にぬけ出し、最初は緩慢であった發展のテンポも、ことに第二次大戦後の独立と経済的好況のおかげで、急激に高まったのである。

そのさい、石灰岩山地への再入植運動の開始地点は、チャレンコによれば、同山地周縁部の集落(さきの分類上での、(3)現代村落)、つまり、そこから開ける平地で穀物栽培がおこなわれるとともに、山地への最初の傾斜地で、ブドウ、オリーブのプランテーションが営まれる、農業小中心地であった。ここはまた、地方市場が開かれ、商人が住んで、地域の経済活動が集中する小都市的集落の観を呈する一方、平野の村落住民がその穀物収穫後、ブドウやオリーブ

の実を拾い集める労働力としてよび入れられる場所でもあった。こうして、平和の再来と秩序の回復のもとではじめて可能となった道路の建設、資本の到来、販路の拡大などを背景として、この地点に経済的繁栄がまずさいしょにおとずれたのである。

この動きはつづいてここを起点として山地をのぼり、その内部に向う。ここを出発した入植者たちは、古代村落遺跡内に再入居し、その周囲にオリーブ・プランテーションをひろげてゆく。こうして生れたのが、さきの分類でみた、古代・現代村落の同居(2)であった。シリア北部の内陸石灰岩山地は、1300年以上もつづいた経済的孤立からようやく脱け出て、域外の大都市とむすびつくようになったのである。

第一次大戦後の30年ほどの期間に進行したこの事態と同じ現象が古代においても、ただしより時間をかけて、より大規模に、同じ石灰岩山地でおこったことを物語るのが、チャレンコによれば、考古学的、碑文学的資料であった。考古学的調査が教えるところによれば、この地方でオリーブ・プランテーションの景観(ただし、泥灰土土壌がある東傾面では、ブドウ・プランテーションの景観)が生れたのは、紀元後1世紀であったが、村落がつぎつぎと形成されるのに応じ、また、農家はその数を増すにつれて、農民たちは、平野から最も距り、したがって当然のことながら、穀物栽培に最も適さない地域にチャレンジしていった。そして、繁栄が絶頂にたった5、6世紀に、石灰岩山地全体はオリーブ・プランテーションでうずめつくされるようになった。チャレンコはこう考える。そうだとするならば、プランテーションの不振と、建築活動の不振もまた見合っている筈であり、オリーブ・プランテーションの繁栄にみちびいたその同じ条件が失われるとき、峰上の村落もまた放棄されるであろう。それは事実、7世紀初めいごにおこったのである。そしてその条件と

は、第一次大戦後の約30年のあいだに進行したとは逆方向の事態が現出したこと、つまり、石灰岩山地のオリーブ・プランテーション地帯の外部世界との流通関係が絶たれたことである。原因はいうまでもなく、この地方にながくつづいた平和にかかわって、戦争の影響が直接およんだことにある。

そうだとするなら、この地帯の7世紀はじめの廃村化の原因は、すぐれて歴史的（ピレンヌ・テーゼとの関わりについては後述）なものであって、バトラー、マッテルンなどの考古学者がこの地帯の荒廃と、残存する無数の記念碑的建築物遺跡とのコントラストからうけた強烈な印象のもとで安直に採用した濫伐（7世紀のはじめペルシア人、つづいてアラブ人によるとする）という——ローマ帝国「没落」の要因としてのいわゆる地味枯渇と好一對の——エコロジー的原因論は斥けられなければならない。チャレンコによれば、この地方が現在のアマヌス山脈やキジル・ダグのように、当時広大な森林によっておおわれていたとは考えられず、エコロジー的事情は、古代も現代も不変である。古代村落遺跡の建築物で用いられた木材は、豪華な建物中の大きな梁のようなものは、裕福な住民によって、他の高価な建築資材とともに、外から——例えば近くのアマヌス山脈の森林から——取り寄せることができたであろうし、さほど大きくない梁なら、プランテーションのオリーブの幹や、近くの山に自生するソゴで事足りた筈である。また、バトラー、マッテルンが説くように、森林濫伐の結果露出した表土が降雨によって穿たれ、肥沃な土壌が流出してしまったとするのも当然でない。毎年の降雨は谷にわずかな土量を流出させるだけであり、それは、石灰岩が滲透性をもつこと、および、その表面が凸面のふちどりで仕切られていることのためである。そのうえ、流出したわずかな土量は、石灰岩そのものの分解土によってうめあわさるのである。

以上、チャレンコによってなされたシリア北部の石灰岩山地の考古学的調査のあらまじと、そこでかれが抱いた関心について一とおりがと眼をとおしてきた。今やわれわれはチャレンコのこの研究に主として拠りつつ、以下に、

- (1) 古代においてオリーブ・プランテーションを可能ならしめた内在的要因として、もともとこの山地にそなわっていたエコロジー的条件、
- (2) かかる可能性を現実にはひき出す誘引となった、この地方の外部世界との接触の、および、その結果としての開放市場経済の成立の、歴史地理学的な条件、
- (3) ローマ支配下の紀元後1世紀にはじまったオリーブ・プランテーション村落が6世紀に全面的に開花する歴史過程、およびそれが7世紀前半急速に没落する歴史事情（本稿では省略）、を検討してみたい。それはいわば、本稿冒頭の、6世紀のオリーブ・プランテーション村落像のデモンタージュである。

石灰岩山地のエコロジー

北部シリア内陸の石灰岩山地は、内陸シリア大高原の隆起した周辺部に当り、その表面はカルスト地形を現出している。すでに述べたように、それは北部、中央部、南部の三山塊に分けられるが、全体として、この山地の西側は、アフラン、オロントの二河川に沿ってシリアを南北に走る断崖によって限どられ、地中海海岸からやって来る者の眼の前に、文字どおりの自然の障壁として屹立しているばかりでない。地質と景観の上でも、泥土から成る肥沃な緑の河岸平野が、ここで、むき出しの、荒寥たる灰色の石灰岩岩山に一変する。これに反し東側は、山地内部から発する峰波が、次第に低くなって丘陵につづき、泥灰土からなる、肥沃な内陸平野のなかに没してゆく。ここでは、西側とちがって、山地と平野は相互に入り組んで、時にニュアンスに富んだ景観をつくり出し、また、山地

の谷間は、耕作可能な土壌を沖積させつつ、平野の沃土に途切れなくつらなってゆく。

石灰岩山地そのものは、けっして岩だらけのコンパクトな塊ではない。実際に岩が鋭くきりたった場所もあるけれども、肥沃な土地がいたるところ、時には奥深くまで、この岩地にくいこんでいる。ここにはまた、陥没の上に沖積土がたまって出来たいくつもの、相当広い盆地も見出され、またそれほどでなくとも、さまざまな広さの耕作可能地が分散的にひろがって、ふもとの台地から峰の上にまで及んでいる。そして石灰岩の岩地そのものも、いたるところで自然のテラス、窪み、亀裂をつくっており、石灰岩の分解でできた土が、その表面をおおい、裂け目をうめている。

この石灰岩分解土は赤く、容易にほぐすことのできる、耕しやすい沃土であって、穀物であろうとプランテーションであろうと、すべての乾燥農業に適している。

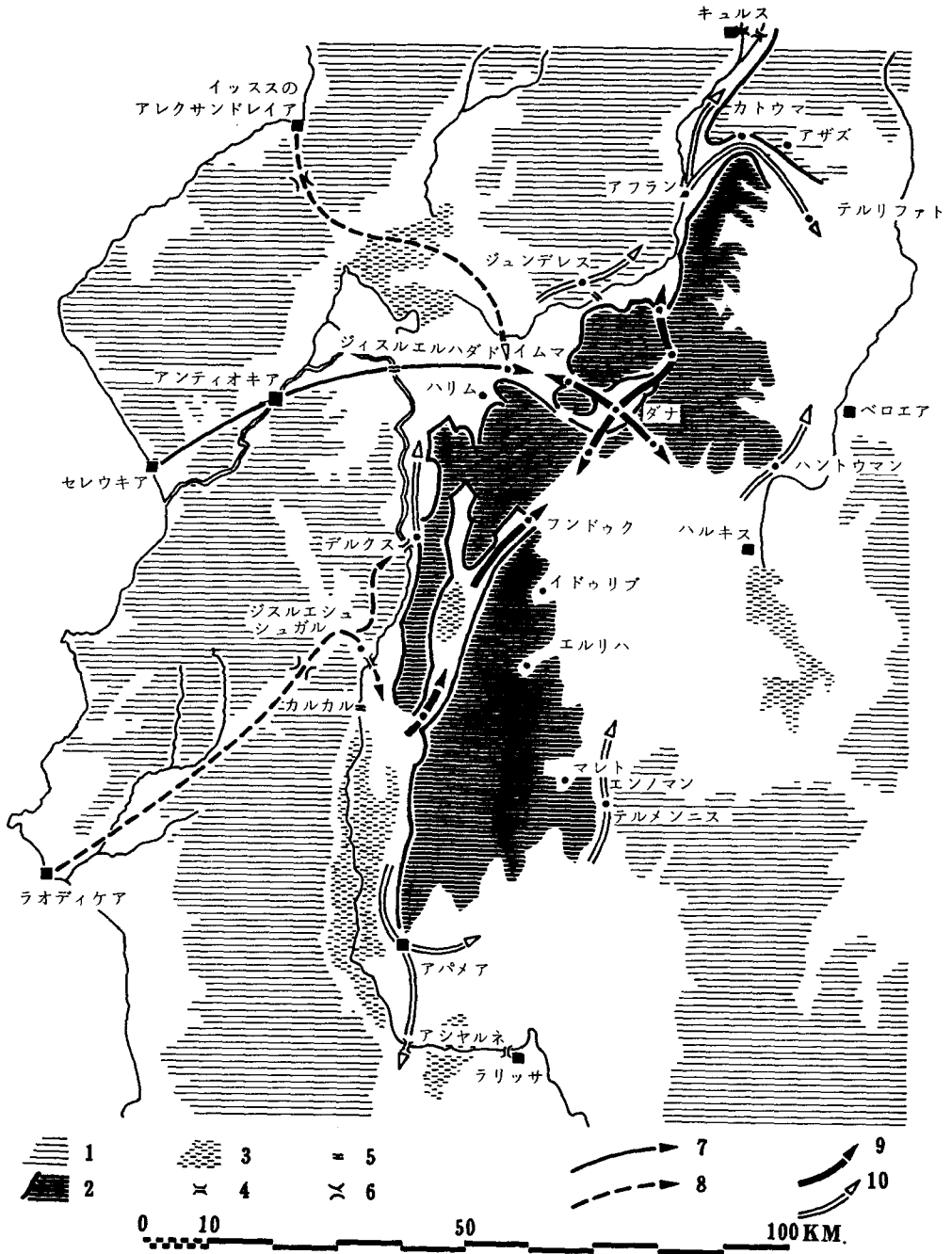
石灰岩山地の水利関係については、すでに何度かふれたが、一口でいって、ここは、水をふんだんに使う生活とは無縁である。地中海にそぐこの山地の西側のオロント河、および、アンティオキアの上手でそれに合流するアフラン河も、東側の内陸平野を北から南に流れてエル・マートの沼地で消えるクウェイク河も、この高地を灌漑してはくれない。またその支流などというものも、もちろんここを流れてはいない。なにしろ、この山地に降った雨水は、石灰岩の滲透層を通過して地下深くの非滲透層にまでたっし、地下水となってそのうえを流れ、山地の西の周縁ではじめて一連の泉となって地上に湧き出るのである。それはもちろん山地の灌漑にまわすことはおろか、山地の住民の飲料水としても利用できない。また、石灰岩を掘り下げて、この地下水を井戸でくみ上げることも、低地でなければおぼつかない。事実、井戸は、石灰岩山地の東と西の周縁部の広い平野に分布

し、山地内では、例外的にいくつかの盆地に見出せるにすぎない。

したがって石灰岩山地の住民はもっぱら天水にたよるしかない。その独特の利用法についてはすでにのべた。そしてこれもすでにのべたことだが、雨は、11～12月に、つづいて翌年の2～3月に集中して降る。降雨量は東隣りの山脈、ジェベル・ノサイリほど(1000ミリ)ではないもののそれでも可成りあり、東縁には年間400ミリの等降雨線が、西縁には南で600ミリ、北で500ミリの等降雨線がはして、石灰岩山地全体をその間にすっぽりとおさめてしまう。そしてその東に展開するのが乾燥内陸平野であり、西に展開するのが湿潤な海岸地帯である。

この地方の現在の植生は、チャレンコによれば、再開されたオリーブ・プランテーションを別とすれば、文字どおりの荒野である。岩地のなかにある、土のつまった裂け目は、夏ともなればパカパカに乾ききってしまい、雨期にそこに生えた野生の草も6月いご枯れきってしまう。木としてはただ、たけの低い柏がまばらに生えているほか、いじけた灌木のしげみがあるだけである。それ以外には、西向き斜面に南フランスの石灰岩地帯をおもわせるやぶ、最高の山頂に生える若干の樹木、それにイスラム教住民が大事にまもっている、イスラム教聖堂をかこむ聖林、といったものが見出されるにすぎない。そして植生上のかかるまずしさをわれわれはチャレンコとともに、オリーブ・プランテーションがはじまる以前の古代のこの地方に想定してかまわないであろう。

以上のべたところを全体としてふりかえってみると、荒野という植生上の外観にもかかわらず、この石灰岩山地は東の乾燥内陸平野と西の湿潤海岸平野とにはさまれた地域として、もし歴史的諸条件にめぐまれてなんらかの刺戟が外から加わり、その結果人間の努力が投入されれば、目をみはるような発展の可能性を秘めてい



第3図 石灰岩山地への接近路と貫通路 (チャレンコ, 第36図)

1. 海拔 500 m 以上
2. 石灰岩山地とその西側断崖平均 500 m
3. 沼地
4. 橋
5. 徒渉地点
6. 峠
7. 主要接近路
8. 副次接近路
9. 貫通路
10. 山地周辺路

たということができよう。かかる努力の方向がオリーブ・プランテーションであることは、のちにみるように、この地域の紀元後1世紀いごの歴史によって裏書きされるが、それは、この地域のエコロジーそのもののなかにすでに内包されていた。

天水だけで足りるオリーブはここで、その生育上もっともめぐまれた条件をもっている。夏季は乾燥して温度が高い。開花期の温度は摂氏18度、吹く風は涼しく、過度の湿気を帯びていない。冬期は多量の降雨をみ、気温もほどほどで、ただ例外的に摂氏マイナス8度まで下るにすぎない。オリーブは寒気で一旦やられても、氷ついた幹を根本で伐ってやると、翌年の秋に新芽をふいて来るので、かえってこれが、あまりに老齢化したオリーブの若返りになる。また、気温の異状な低下から来る被害は、平野と谷間で甚大であるが、山地の高処や太陽のあたる斜面では、それほどではないのである。

石灰岩地質もオリーブ・プランテーションに適合的だ。すでにふれたように、石灰岩山地は、陥没した窪地や深い裂け目に富んでいて、窪地の上につもったり、裂け目をふさいだりしている土は、耕し易く、肥沃で、しかも表土に水を含まない性質をもっている。この裂け目に8~10メートルの間隔で植えられたオリーブの木は、やがて裂目に根をはり、樹間一ぱいに枝をはる。そのうえ石灰岩地質の起伏に富んだ地勢は、オリーブ・プランテーション設定にあたって、もっとも日当たりがよく、風とおしもよく、夏の熱風、冬の寒風にたいしもっとも保護された最適の場所を、無数に提供する。

こうしてシリア北部内陸の石灰岩山地は、オリーブ・プランテーションの絶好の条件を含んでおり、事実のちにみるように、紀元後1世紀いご、この山地は、— 土壌の過度の乾燥をさまたげる南西方向からの比較的湿度のある海の風をうける関係で — とくに南および西むきの傾

斜地に、それを展開させていくであろう。

開放市場経済展開の条件

シリア北部の石灰岩山地が、相互に自然的条件を全く異にした、地中海沿岸地方と内陸平野地方とはさまれた中間地帯であること。しかし石灰岩山地の、この両地方との地理的なリンクの仕方は対照的であること。この点はすでにふれたが、以下、石灰岩山地の外部世界とのコミュニケーションの問題にいささかたちいって調べてみたい。

上述のようにこの山地は地中海沿岸からの来訪者にとって、壁のように目の前にそそり立っているため、後にのべるアンティオキア・ハルクス（現在のキンネスリン）街道を別とすれば、山地の南端ないし北端を迂回して東側に出なければ内部に入ることができない。だが一たんこうして山地の東側にまわると、これもすでに言及済みだが、ここで開けている無効の谷は開放的であり、平野の方からこの谷をのぼってゆくことによって、いつの間にか山地内のもっともはなれ、もっとも高い峰上に出てしまう。

事実、現代の入植は東からおこったし、われわれがここで問題としている古代においても、石灰岩山地への居住がその東縁から始ったことは、遺跡にのこされたモニュメント、ならびに碑文の示す年代から確認される。ヒトの移動とともにモノの移動、つまり交換のシステムがすすんだことは言うまでもない。こうして山地住民は、地域間市場関係の次元で、東の内陸平野の諸都市とむすびつけられることになった。そこを通じて供給されるのが、たとえば、東方のステップ産の食肉であり、東方の平野産の穀物であった。これに反して山地住民が地中海沿岸地方から調達するのが、遺跡調査から判明するところの、そこで使われた木材、瓦、モザイクなどの建築資材であった。だがシリアの地中海沿岸地方とのこの経済関係で、何にもまして重

要であったのは、アンティオキアをはじめとするこの地方の諸都市に、また、そこを通じて地中海沿岸の他の諸地域にはこぼれた、石灰岩山地の大量特産商品、オリーブ油である。ほかのことばでいえば、シリアの地中海沿岸地方との地域間市場関係の次元でのむすびつき、だが同時にそこを通じての、地中海沿岸の他の諸地域との国際市場関係の次元でのむすびつきこそ、石灰岩山地に、古代地中海世界の第一級生活必需品（後述）、オリーブ油の生産を介して、のちにみるように、いままでなかったような経済的繁栄の息吹きをふきこむことになったのである。

石灰岩山地が東西の隣接地域との間にむすんだこのような多様な経済関係は、いうまでもなく、当時の道路組織によって実現された。ではそれはどんなものであったか。チャレンコとともに、これを、1. 地域外とのコミュニケーション、2. 地域内でのコミュニケーションに分けて再構成するとつぎのようになる。

1. 地域外とのコミュニケーション

シリア北部の石灰岩山地は、古代におけるこの地方の四大都市、すなわち、東のアンティオキア、北のキュルス、西のハルキス、南のアパメアをむすぶ菱形のなかにはいる。この菱形の四辺を、山地周縁を迂回する四道路とするならば、東西をむすぶハルキス・アンティオキア街道、南北をむすぶアパメア・ハルキス街道、つまり山地を横断、ならびに縦断する道路こそ山地内部を外界とむすぶ大動脈であった。

アンティオキア・ハルキス街道 この街道は今日もおお存続しており、アンティオキアを発してイムマ（イェニ・セヒール）で山地に入り、ダナ盆地を通過し、リタルバ（テリブ）で広いシリア内陸平野に入りハルキスに達する。それは、峰上の村々と関わりことなしに山間の隘路を通過する石灰岩山地横断の最短路であり、多大の費用と労力をかけて山をきりひらき、岩をうがってつくられたもので、その大きな敷石は

今日なお伝わっている。それはなによりもまず、エウフラテス河の渡し場や、ステップに設けられたアンティオキア地方の前哨基地やに到達するためのローマの軍道であるが、同時に、地中海にメソポタミア地方をむすびつける大連絡路であり、そしてまた大中継貿易路でもある。したがってこの大横断路は、その限りでは、石灰岩山地そのものにとって外在的な存在であった。そして、この点では内在的な性格をもった大縦断路であるアパメア・キュルス街道（後述）と、つぎの2つの仕方でむすびつき、後者にみちびかれてはじめて、石灰岩山地中の最も内奥の村落とも連絡することができた。すなわち、

- (1) 石灰岩山地内のダナ盆地でアパメア・キュルス街道と直接に交錯することによって、
- (2) 石灰岩山地外でまず山地周辺の迂回路（上記）と交錯し、後者を介してアパメア・キュルス街道と接続することによって。

アパメア・キュルス街道 アパメア・キュルス街道は、アンティオキア・ハルキス街道のように、その全長において、じかにその存在がたしかめられるわけではないが、考古学、碑文学の提供する材料によって、ローマ時代におけるその道程が、つぎのように再構成できる。すなわち、アパメアから発したこの街道は、オロント河流域のガブ平野を北上してカストゥンにいたり、ジェベル・ツァヴィエとジェベル・ドゥエイリ＝ウァスタニとの間の沼沢地ルグ、つづいてジェベル・ツァヴィエとジェベル・イル・アラとの間の隘路を経て、一たん石灰岩山地外のハルキス平野に出る。そしてジェベル・パリシャの東南縁に沿ってすすみ、同山脈とジェベル・スリルとの間の谷を通過してダナ盆地に入り、そこからふたたび石灰岩山地中の北部山塊ジェベル・シマンの懐にはいりこんでゆく。そしてシェイ・バラカトの東斜面をよぎり、ダルタツェ峠をこえてカトゥラ盆地に下り、盆地を通過しその北端のデイル・シムアンおよびその北

の峠をこえて小盆地に出、さらにいま一つ峠をこえた末によく石灰岩山地を出てアフラン河谷のバスタにいたり、その河谷を遡ってアフラン、キュルスに到達するのである。

チャレンコによればこの街道は、紀元前9～8世紀アッシリア軍侵入の径路の一つとなったもののようで、つづいてヘレニズム時代には、セロイコス王国の大軍事的中心地アパメアと、王国の北方城砦キュルスとの間の、およびこの両都市とハルクスとの間の、ひとり側面攻撃から護られた、唯一可能な直接連絡路であった。この役割はローマ時代の初期も基本的に変らなかったが、紀元後72年、アンティオキア地方の防衛線が東方に前進してヒエラポリス＝メムビックに移り、おそらくそれに応じてアンティオキアとエウフラテス河とを直結するさきのアンティオキア・ハルクス街道ないしアンティオキア・ペロエア（アレppo）街道が整備されるにおよんで、アパメア・キュルス街道はその軍事的意義を失うにいたった。だが、ほぼその全長において石灰岩山地を南北に貫くこの大縦断路は、石灰岩山地の内奥にむかうすべての主要な道がそこから分岐するこの地方の交通上の基軸幹線としてひきつづき機能しつづき、このコミュニケーションの作用で石灰岩山地全体に一つの緊密性をあたえるとともに、あるいはアンティオキア・ハルクス街道とこ交錯を通じて、あるいは石灰岩山地周縁の迂回路との交錯を通じて（上述）、石灰岩山地内奥の村落を外の世界——ことにローマ時代にはアンティオキアを中心とする地中海沿岸地方——にむかって開放することになったのである。

2. 地域内のコミュニケーション

石灰岩山地内部に分布する無数の道は、概していえば、一つの谷あるいは盆地から他のそれへと、通過が必ずしも容易でない峠を越えながら走るもので、人間やウマ、ロバ、ラバなどの

動物のあしで自然に出来た道であるが、そのあるものは、人通りもはげしく、その盛土が示すように、明かに荷車が通れるよう、人手をかけて整備されたものであった。

道は主要なものと、副次的なものに区分でき、前者は、南部山塊、中央部山塊、北部山塊のそれぞれの地勢に応じて、つぎのように分布していた。

(1) 南部山塊 さきの南北大縦断路でアパメアからムハムベルまで至り、つづいてそこから分岐して、

(a) 山塊を東に横断しエル・リハに達し、山塊周縁の集落イドゥリブを経てハルクス平野に入る街道、

(b) 山塊内を東南方に進んで、同山塊内の唯一の都市的大集落エル・バラに達し、そこから多方面に分岐して山塊周縁の諸地点にぬける街道、

の二つがあった。

(2) 中央部山塊 南部山塊とはちがって、ここでは道路網はさほど密でなく、唯一可能な交通方向は、南北に平行して走る（前述）、ジェベル・バリシャ、ジェベル・イル・アラ、ジェベル・ドゥエイリ＝ウァスタニ、の三山脈間の盆地を南北に通過するものであり、これに反して山脈を東西に横断する道路は存在しなかった。すなわち、

(a) ジェベル・ドゥエイリとジェベル・イル・アラ間の道は、アルメナーズからケフェルティンにのぼり、この二つの山脈の間をこえてアムク河畔に下り、サルキン、ハリムを通過する。

(b) ジェベル・イル・アラとジェベル・バリシャ間の道は、フندوقでアパメア・キュルス街道からわかれ、この二山脈にはさまれたシェルフ盆地を通過してハリムに到達する。

なおこの交通の要衝ハリムからは、ジェベル・イル・アラの西斜面をよぎってアルメナーズに至る道、ならびに、ジェベル・バリシャの東側

の棚状の台地の村々を経て北方でダナ平野およびアンティオキア・ハルキス街道と出あう道も、発していた。

(3) 北部山塊 ジェベル・シマンの北部では、アフラン河谷との連絡は困難で、ごく例外的な地点で可能であるにすぎず、したがって大部分の村落は、南北にのびるこの山脈の尾根から発する谷を介して東方の内陸平野に連なっていた。ただ例外は、さきの大縦断路の東に、これと平行して峰上を走る南北路であり、それはカトゥマから発して、デイル・ミシュミシュ—キマル—ブラード—カフル・ナボ—カブタン—アンガラを経、アンティオキア・ペロエア街道上のウレム・エル・クラブに到り、さらにまっすぐのびてハルキスに達していた。

その他、ジェベル・シマンの南部のダナ盆地で交錯するいくつもの道は、ジェベル・ハラカをよぎって、石灰岩山地の東方に展開する大内陸平野につらなつた。たとえば、テズィンからエルハブを経てアレppoにいたる道がそうであり、また、更に北方でアフラン河浅瀬のペルアネから、マシエド・ルヒン—ヘズレ—トゥルマニン—エルハブを経てトカードに到り、そこからあるいはカブタンを通過してアレppoに、あるいはアンガラを通過してハルキスに達する道がそうであった。

これを要するに、南部山塊では交通網がもっとも密であり、無数の道が内部から東の平野にむかっていた。これに反して中央部山塊では交通網が疎であり、加えてわずかの道は幅がせまく、ばらばらに進んで石灰岩山地の外に出てはじめて互いに連絡した。北部山塊は交通の基軸が南北に走る尾根であった。またジェベル・バリシャとジェベル・シマンの間のダナ盆地は、アンチオキア・ハルキス街道とアパメア・キュルス街道との十字路にあたっており、石灰岩山地内部の交通の、ならびに、そこをよぎる外部との交通の、大中心地であった(前述)。そして

最後に、おしなべて南部、中央部、北部の三山塊は、その西側ではごくわずかの突破口しかもたなかったのに反し、東側では交通は容易であり、かつ密度も高いものであった。

以上が、南部、中央部、北部の三山塊内の主要な連絡路であるが、それからさらに副次的な道が無数に分岐し、それらは谷をつたい、峰をこえて、毛細管さながら山地村落に到達した。いや、これら村落は、そもそも、かかる道路網の一端と直接に接触する地点をえらんで設定された。古代遺跡にかつて存在していた村落は、どんなに重要であろうと、富裕であろうと、ただこのかばそい道で、外の世界とつながっていた。他方、峰のうえや台地のうえには、村落相互をつなぐ別の細道が走っていた。

地形は一見、通行不可能のようにみえても、騎馬でそれぞれの山脈内を経巡ることは、実際には、さしたる困難をとまなわなかった。そしてもちろん、ロバとラバほど、土地にあった交通手段は見当らなかつた。荷車はただ例外的にしか用いられなかつたようであり(上述)、資材、商品、そして農産物はほとんどもっぱら、あるいは駄獣の背につみ、あるいは人間の肩にかつがれて、運搬された。いずれにせよ、地域内コミュニケーションの原初的性格は、古代村落遺跡から想像される農家建築の豊かさと、きわだった対象を示していた。

さいごにふれておかなければならないのは、石灰岩山地では、すでに名前が出た、南部山塊のエル・バラ、北部山塊のブラードを除くと、古代ではついに、地方的中心地としての都市的集落の形成がみられなかつた、という事実である。山地村落は相互に相違はあるものの、総じていづれも、独立した地歩を有しており、地方都市を中心としたヒュラルキー秩序のごときに組み込まれなかつた。むしろ村落は、道との関わりにおいて、ことばをかえれば、道を介して外の世界にあわせて、方向づけされていたのである。

- * 本稿は昭和53・54年度科学研究費補助金（総合研究A，研究代表者 竹内啓一，課題「地中海地域における集落の形成と発達に関する比較研究」）による研究成果の一部である。